
魔法少女と実験兵器7号

噂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女と実験兵器7号

【NZコード】

N1566Z

【作者名】

噂

【あらすじ】

仲間を救うために一人犠牲になつた少年。その少年が違う世界に転移した！！

プロローグ（前書き）

つ、ついにやってしまった……だが、後悔はしない。なのでみるときは、温かい田でお願いします。

プロローグ

暴走したポポルによつて橋を壊され、先に進めなくなつたニーア達。

「ぼくが何とかします！」

エミールは、そう言つといふ三人と一緒に冊を包み込む透明な球体を展開させた。球体は宙に浮き、壊れた橋の先に向かつた。

「あ！」

カイネは後ろを向き驚いた。ポポルがニーア達のいる球体に黒い何かで掴まれていた。そしてポポルも狂つた笑いを上げながら宙に浮いた。

「だめか！ クソ！」

黒い何かに掴まれた透明な球体は身動き一つとれなくなつた。

「だいじょうぶです！」

「えつー！」

エミールの言つた言葉にカイネが疑問の声を上げた。

「ぼく、少年だった頃の石化させてしまうのも、この醜い体になつてからの姿も、本当に嫌でした。だけど、同時に『誇り』でした。だって、この姿のおかげで、みんなと・・・仲間になれたもの。」

エミールはニーア、カイネ、シロの一人と一冊を見てから。

「みなさん、ありがとうございます」

と、感謝の言葉を言った。

「エミール」

やつてニーアはエミールに近づいたが、エミールが杖を出しへニーアを止めた。

「今、人を守るための兵器になれること、本当に感謝します。」

「よせー。」

カイネがエミールを掴もうとしたが、透明な球体が一つでき、エミールの球体は黒い何かに少しづつ引っ張られている。

「さあ、言つてくださいー。」

「エミールー！」

シロがエミールの名を呼ぶ。その間にもエミールの球体は黒い球体に向かって引っ張られていく。

「ぼくなら、だいじょうぶですかー。」

エミールの所から紫色の魔方陣がでてきた。その魔方陣は、ニーア達の球体に当たり、バネのように押しだした。

「Hミール！Hミールツ！」

ニーアがHミールの名を呼ぶ。

「Hミール！Hミール！エミール！Hミール！」

カイネがHミールの名を呼びながら球体の中を叩いたり蹴つたりして壊そうとするが、球体は頑丈で叩かれた場所に波紋が広がるだけだった。

Hミールの球体はついに、黒い球体の中に入り始めた。

「……やれやれ。カイネさんは乱暴だし、白さんは口うるさいし、肝心な時にケンカしないといいけれど……もう、ぼくは仲裁できませんからね。」

黒い球体の中に全部入ったHミールの球体は、黒い球体の力に負け始め、所々ひびが割れが起こる。

「ニーアさん……ぼく……あなたにもう一度……会い……みたい。あなた……に……。」

膝を抱え、しゃくりあげて泣いた。そして、球体の全体にひびが入つた。

「死にたくないなあ……死にたく……ないよお……。」

それが、Hミールの最後の言葉であつた。

黒い球体の中で突然、白い光が輝いた。白い光は爆発を起こし黒い

球体と暴走したポポル”と飲み込んだ。

白い光が收まると、ビルの一部が円状に消えていた。円状に消えたビルの爆心地の中心にカラソと、音を立て、一つの鉄の杖が落ちていた。

エミールは冷たい地面の上で皿を覚ました。

「・・・・」は、どう？・・・ほく、死んだんじゃ・・・。」

エミールは目を覚ましたが、今、自分の状況を把握できていなかつた。そんな中、突然、声が聞こえた。

『聞こえますか、僕の声が聞こえますか？』

「あれ、声が聞こえる？」

『聞いて下さい、僕の声が聞こえたあなた、お願ひです！僕に少しだけ力を貸してください！』

「助けを呼んでいる！」

『お願い！僕の所へ！時間がもう・・・』

エミールは、走つて、声が聞こえた所に走つて行つた。

プロローグ（後書き）

感想をお願いします

出番 (前書き)

もつ、せつせくグダグダです。そして、作者は原作知識は皆無です、
なのでアドバイスや反省点などがあれば教えてください。

出会い

エミールが着いた時には、建物が所々壊れていた。そして、悲鳴が聞こえ、そこを見ると、そこには一人の少女と一匹の動物がいた。

「あぶない！」

黒い化け物が少女に向かっていった。エミールは少女を突き飛ばした。砂煙が晴れると少女がいた地面は抉れていた。

「はやく、逃げて下せーーばくは、ここで食いとめますからーー」

「は、はー！」

少女が逃げるのを確認してから、エミールは石化の田を使った。化け物は一瞬にして石になった。

「これは、なんだろ？ マモノとは違つしない。」

エミールはこの、黒い化け物のことを覚えていたが答えが見つからない。

「シロさんがないたら、何か分かるかもしれないけど……」

「ふええ、なんで、石になっているのーー？」

後ろから声が聞こえ振りかえると、そこに止ま、やつはエミールが逃がした少女と動物がいた。少女に至ってはさつきと服装が違うが。

なのは said

助けを求める声を聞いて急いできたら、見たことのない何かがフュレットさんを襲っているし、フュレットさんは喋り出しちゃうし・・・

「えっと……何がなんだかよくわかんないけど、いつたいなんなの? 何が起きてるの?」

「君には資質がある… お願い、僕に少しだけ力を貸して?」

「資質?」

「僕は、ある探し物のために、ここではない世界から来ました。でも、僕一人の力では思いを遂げられないかもしない……だから、迷惑なのは分かってはいるんですが、資質をもつた人に協力してほしいで…」

フュレットはなのはの手から離れ地面に降りる、なのはと向き合つ。

「お礼はします、必ずします! 僕の持っている力を、あなたに使って欲しいんです。僕の力を……魔法の能力を…」

「魔法?」

魔法つて、手から火を出したりするあの・・・

「グオオオオオオ!」

「あぶない！」

男の子の声が聞こえた瞬間、突き飛ばされた。目の前に何かが落ちてきて、砂煙を上げた。

な、なに…? と、なのはは尻もちを付いた。砂煙が晴れると、やつきまで、私がいた場所は地面が抉れていた。

「はやく、逃げてトヤコ…ばくば、ソソで食ことめますからー。」

「は、はー！」

なのはは、昔の西洋な服装を着た男の子に言われ、急いで立ち上がり駆けだした。

「はあ、はあ、はあ、あの男の子…。」

私、一人逃げて、あの男の子を助けたいの。

「フュレットさん、私、あの男の子を助けたいの…どうすればいいの?」

「これを。」

そういうと、フュレットさんは首に掛けていた紅い宝石をわたしてきた。それにしても…。・・・

「暖かい」

「それを手に、目を閉じて…心を澄ませて…僕の言つたとおりに繰

り返して……！」

言われたとおりにする。

「いい、いくよー。」

「うんー。」

「『我、使命を受けし者なり』」

「『我、使命を受けし者なり』」

「『契約の元、その力を解き放て』」

「『えつと…』『契約の元、その力を解き放て』」

「『風は空に、星は天に』」

「『風は空に、星は天に』」

「『そして不屈の心は』」

「『そして不屈の心は』」

「『この胸』」

「『この手に魔法を…レイジングハート・セーブト、アーップ！…』」

声が聞こえ、私は光に包まれる。

「ふえ、ふええ！？嘘！」

フュレットさんに言われて、魔法の杖と強い衣服の姿を想像したら。今、着ている服が変わって、白い服になつたの。

「な、なんなの、これ？」

「これで、やつきの男の子を助けに行くんだ！」

「へ、うん」

私は、来た道を戻つた。

「ふええ、なんで、石になつていてるの…？」

やつきの、何かが石になつっていたの。

「今のうちに封印していくださー！」

「よく、わからないけれど、どうすれば…？」

「心を澄まして。心の中にあなたの呪文が浮かぶはずです」

心を澄す。すると心の中に呪文が浮かび上がつた。

そして、唱える。封印する呪文を。

「リリカルマジカル」

「封印すべきは恋まわしい器、ジュエルシード」

「ジュエルシード、封印！」

sealing mode . set up .

レイジングハートから声が発せられた後、ピンク色の魔法の紐が黒い何かに絡みついた。すると、黒い何かの額の所にXXXIの数字が浮かび上がる。

stand by . ready .

「リリカルマジカル。ジュエルシードXXXI！封印！」

sealing

黒い何かは光を放ち、ジュエルシードだけが残った。

「これが、ジュエルシードです。レイジングハートで触れて」

レイジングハートの中に入った。

なのはの白い服はさつき着ていた私服に戻った。そして、手の平に紅い宝石が乗った。

「あ、あれ？おわったの？」

「はい。あなたと、あそこにいる男の子のおかげで。ありがとう・・・

・
」

そうこうと、フュレットはその場で倒れた。

「ちょっと、大丈夫！？ ねえ！」

「あの、早くここから逃げた方が・・・」

男の子が言つた後、周りではパトカーのサイレンの音が聞こえた。

「あの、あなたも来て下さい」

「は」

フュレットを抱えたなのはと男の子はその場を後にした。

出会い（後書き）

もう、穴が有つたら入りたい・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1566z/>

魔法少女と実験兵器7号

2011年12月5日20時11分発行